

令和2年度小平市公民館運営審議会委員研修会レポート

日 時：令和3年2月17日（水）午後2時から4時
テーマ：コロナ禍での公民館のあり方について
講 師：田中雅文氏（日本女子大学教授）
会 場：中央公民館講座室2（会場24人、ZOOM12人）
参加者：審議会委員12人、事業企画委員8人、友の会等5人、職員11人

勝谷 美紀子

初めての試みで Zoom・ハイブリット形式での研修会でありました。
対面の中に IT システムを組み込み、未来のつながりに向けて、新しい学びが実現できることを確信できました。

新任の委員もいることから、講師講演はコロナ禍前の従来の公民館の役割が解かりやすく再確認しました。

しかし、オンラインだけでコロナ禍での“公民館あり方“が解決する訳でもなくもう少し具体策が欲しかったと思いました。テーマに届くには、少しもの足りなさを感じましたが、ここで、委員として思考・検討・議論していく必要があると思いました。

時間的配分の反省点もありましたが、従来型グループディスカッションと違い十分な意見交換は出来なかったと思います。

更にこの課題解決の糸口を模索する上で、事業企画委員会・公民連との意見交換会の機会を改めて持っても良いのではと思いました。リモートで参加した方から時間が無くて質問・意見交換が出来なかったとありました。

新型コロナウイルス感染拡大の終息が見えない中、リモートと対面の理想的な組み合わせが必要である点から、オンラインの発信により、情報の提供、アクセスが出来なかったところへ学びの場があることを、苦手意識のあるシニアに若者を取り込み Zoom の講習会を開いてはどうでしょうか。

初めてのリモートも参加した研修会でしたが、大きな間違いもなく成功したように思えます。田中先生の講義は分かりやすくよく理解できました。ただ、もう少しウイズコロナ、アフターコロナでの公民館のあり方に時間を割いていただければ、と思いました。

これからの公民館、サークル活動も含めて、コロナ禍では、集まるのもままならない現状ですが、リモートも含めて若い人たちを取り込むいいチャンスだと言われていましたが、まったくその通りだと思います。リモート参加を前提とした講座やサークル活動もできれば、と思います。

但し リモートだけで公民館問題が解決するわけではないので、従来型のタイプでどのようにしてコロナ禍の問題を解決するかは 今回の先生の講演では少し足りなかった様に思います。

ここは、今現在の問題ですので、私たちにとっては切実です。この辺は、講演とは別に事業企画委員、公民連の方々と話し合う機会を作っても良いのではと思います。

今回、質問、意見交換タイムでも、多くの質問、適切な質問が多かったと思います。これらを、まとめると、かなり内容の濃い物になるかと思います。事務局大変だと思いますが、よろしくお願いします。

またこれから リモート参加が増えてくると思いますので、リモートだと地域を問わないと思います。少なくとも日本中を対象にしても良いと思いますが、取りあえずは東京千葉埼玉の近県ぐらいを対象にした講義があっても良いのではないか。小平市内の問題にこだわることはないのでは。と思います。

従って、都心の緑化問題とか、高齢化問題、若者を巻き込んだテーマとか情報発信を市内だけでなく 近郊の市にも発信するようにすれば、参加者の増加につながると思います。



公民館運営審議会自主研修会として、標記テーマで田中先生のお話を伺った。

コロナ自粛期間でもあり、中央公民館で2月に導入したテレビ会議（zoom）を使用し、会場参加とオンラインによる初めての研修会となった。会場参加は23名、zoom参加は12名で、審議会委員のほか各公民館利用者懇談会と協議会、公民館職員がそれぞれ参加した。

初めてのテレビ会議であったが、大きなトラブルもなく無事終わることができた。対面によるそれとは違い、質問等においては若干物足りなさがあったが、テーマについては参加者で共有できたと思います。

研修では「公民館とは何か」その「目的」「法的根拠」「学習の意義」そしてコロナ禍における「つながり」を **after** コロナにおいていかに実践できるかが重要であり、現状の成果を生かし、ITシステムの組み込みなど、新しい生活様式を求めていくことが必要であると結ばれた。

講演を拝聴し公民館の歴史を再確認し、コロナ禍での問題点をチャンスととらえ、必要に応じリモートと対面の両立を模索する必要性を再認識しました。

しかしながら、公民館を利用する方々は高齢者が多く IT と無縁の方も多い。公民館に通うことでモチベーションを上げ認知症を予防したり、歩くことで健康を維持出来たり、対面によるコミュニケーションで精神面の安定が出来る。これらは公民館活動を通し、健康を維持することで病院にかかることが減少し、医療費の軽減にも寄与するのではないだろうか。

若者が参加しやすくするための模索もして行かなければならないであろう。だが、コロナ終息後のリモートによる新しい生活様式はまだ見えてこない。



今般、この研修会前に、様々な意見が交わされました。また、初のウェブ会議でもあり、準備、予行演習など、事務方の労は、いかばかりでありましたでしょう。私も、初めての事でしたが、途中、音声は 70 秒ほど途絶え、慌てました。原因は不明ですが復旧し事なきを得ました。

ウェブと会場、両面会議では、会場の様子が十分に把握出来なかったこと、ウェブでの参加者は、気にならないものなのか後日お教えてください。

田中雅文教授は、当市には以前より深く、関わりを頂いておられたと伺っておりました。内容が「コロナ禍」だからとの視点からだけでなく、公民館の基本的な役割、意義を再確認したところには意味があったと考えます。(以前にも聞いたことがあるとの感想もあったようですが)

公民館がどのような課題を抱えているのか、その在り方は、常に求めていかなければならぬことです。引用された『生涯学習に関する世論調査』は、2018 年、コロナ以前のものでありますが、その前の調査でも、「学習」方法は、大きく変容しています。調査結果では、個人での学習方法の比率が高くなっていますが、現在では、さらに増していることは、容易に想像できます。調査結果をもう少し見ますと、「公民館や生涯学習センターなど公的な機関における・・・」の比率も見逃せません。さらに、「学習するとすればどこから情報収集を行いますか」のなかで、公民館、図書館などでのポスター、チラシの回答。また、「学習するとすればどこで講座が開講されると学習しやすいか」の回答で、社会教育施設（公民館、図書館など）比率が、45%を優に超えています。調査時点でこの傾向が強くみられることは、現在でも、全年齢層で高まっていると考えられます。また、インターネットでの学習方法でも、高齢者の比率は 2018 年当時より、高まっていると思われます。公民館があるということが大層重要であることが裏付けられています。田中教授の講演でも強調されていたと受け止めました。

そして、現下のコロナ禍、『今まで思いつかなかったことをやらなければならなくなった』との、言葉どおりでしょう。公民館がそこに在る、都公連の講演で安藤埼玉大学教授も、<場所>を強調していらっしやったことも記憶にあたらしいです。

公民館で何を行うか、どのように運営するか、時代が変わっても、法が変わってもその探求は不変でありましょう。公運審、事業企画委員会の重要性を受け止めました。いま、やるべきことにためらいがあってはならないでしょう。議論を重ねたいと思います。

審議委員として、初めて参加させて頂きました。ありがとうございました。

今回は、初の ZOOM と会場での参加と併用してのハイブリッド方式での開催、すごく意義があったと感じました。

公民館で実際に講座などでハイブリッドやオンラインを取り入れていくにあたり、我々審議委員や職員の皆様が実際に使い、どうしたら伝わるか、一体感が出るか、どう映すと良いのか、など体感することが具体的な利用者への提案に繋がると思ったからです。

実際に当日利用してみて、私は ZOOM での参加でしたが、職員の皆様の工夫のおかげで、想像していたよりも、会場の空気感を感じることができ、会場の皆様にも、私たち ZOOM 参加者の顔を大きく映してくださるなどして、一体感を出してくださり、とても素晴らしかったと思います。事前準備など本当にありがとうございました。

田中先生の講義、初めて伺いましたが、『公民館とは』という本質的な部分を学ぶことができ、とてもわかりやすかったです。ただ、それをどう現実のこの小平市の公民館の中で展開していくのか、というところへの具体策はなく、それは私たちが考えていくことなんだと思いました。

来年度の事業計画、すでに出ておりますが、今コロナ禍の真っ只中でもありますので、まずは中央公民館の講座から、もし今からでも ZOOM を併用できる所があれば、早速取り入れていくと良いのではと思います。試しながら改善点を見つけ、時間をあまりおかずに、利用が必要な今、できることをとにかく取り組んでいく、そのスピードが重要だと感じます。

事業企画委員や他の委員の方からの質疑についても、田中先生の回答はわかりやすく、素晴らしかったと思います。

次は、ディスカッションなどもしながら、実際に公民館を利用されてる皆様を感じてることを更に伺ったりしたいなと個人的に感じました。

正副の皆様、職員の皆様、本当に良い機会を頂き、ありがとうございました。

まず、急に Zoom を使った開催に変更となり、正副の委員と事務局、公民館職員の方々の準備が大変だったことと思います。一か月ほどの準備期間に、委員として何も協力できず申し訳ありませんでした。心配された Zoom と対面のハイブリット方式も問題なく進行でき、ご尽力いただいた方々に感謝したいと思います。

田中雅文先生のお話は、初心者向けで公民館の基本中の基本を教えていただいた感じがしています。半面、公運審のベテランの委員の方々にとっては物足りなかったのではないのでしょうか。

社会教育法第二十条の公民館の目的の中に「健康の増進」や「社会福祉の増進」があることには、はっとさせられました。確かに高齢の方々にとって、公民館に足を運ぶこと、そこで人と語り合いふれあうことが、どんなに心身の健康に寄与していたことかと今更ながら思い至りました。その意味で、高齢者の「引きこもり」を徹底防止するとの観点から三密を避けながらの対面型講座を開催している「吉祥寺村立雑学大学」、「三鷹雑学大学」の例は参考になりました。

また、公民館が社会問題の解決の最前線にいる NPO とつながることの重要性は、コロナ禍においてさらに高まっていると思われれます。先日、社会活動家の湯浅誠さんのお話を聞く機会があったのですが、「子ども食堂」の存在意義も、単に食事を提供することではなく、「多様な人と人をつなげることにあ

る」とのお話でした。まさに公民館の役割の一つである「異世代間交流、障がい者・健常者間、異文化間コミュニティの拠点」と重なると思いました。

学校は最も自由度が低く、みんなが「行かなきゃいけない」場所だから学級崩壊が起こる、とのお話も印象的でした。公民館は法制上のしぼりはあるものの、学校ほど自由度は低くありません。

コロナは社会的弱者に特に強い打撃を与えています。DV、子どもの虐待、女性や青少年の自殺、職や家を失う人などが急増しており、対策は急を要しています。

学ぶ場所は学校だけではない、そして学ぶ必要があるのは子どもだけではない、多様な人々がつどって学び合うことで社会をよりよくしていける、そのような拠点として公民館が機能することが望まれます。

「学ぶ権利」が今一番疎外されている大学生を公民館に引き込んで、得意な SNS や ICT の知識で活躍してもらおうという案も、実現できたら画期的なことです。

コロナの終息後も社会は続いていきます。誰もが暮らしやすい社会に近づけるためにも、特に子どもや若い世代が公民館とつながって、笑顔になれるような活動が増えていけば、将来に希望が持てるのではないかと思います。

江口 建之

田中先生とは 3期ほど前に学識経験者として小平市公民館運営審議委員をされた期間ご一緒したことがあり、学者としてのお立場からの発言・各委員の論点取りまとめ方には感心したことが多々ありました。と同時に先生のご経験等から公民館活動等の事例紹介などには限界があるのではと若干危惧しておりました。

今回上記テーマ（課題）に関する講演用に準備されたパワーポイント資料コマ数 18のうち、上記タイトルに関するコマ数は 僅かに 3コマで 前半の十数コマの多くは（事業企画委員会に関するコマ数を除き）、公民館自体の法的根拠、運営目的、役割等一般的な解説項目で 講演持ち時間の多くが これらに費やされ、肝心の「コロナ禍時代、どのようにして新しい学びの可能性」、「with コロナ、after コロナ時代に オンライン化についていけない人、誰も取り残さない社会教育を如何に推進していくか、その対策」、また未来の繋がり「人と人の新しいつながりの仕掛けづくりー公民館の役割」について 十分な内容・解説・説明の時間もなく、折角の機会ながら 残念に思いました（運営審議委員間での議論も殆ど交わされる時間的配分も少なく）。

今回は運営審議委員以外に公民館の事業運営にかかわる方々も参加されておられましたが、改めて運営審議委員会の真の在り方、目的は何か 今一度原点に戻って議論すべきではないと思案したところです。

高橋 雅子

公民館の発祥について、戦後の復興期からの話がありました。寺中作雄の『公民館の建設』をもう一度しっかり学んでみたいと思います。

このコロナ禍の中で「公民館での学習の意義、役割」をもっと重点的に聴きたかった。

質問の時間に、公運審委員の他にも事業企画委員の方々から出た質問、提案を受け止め、来年度の課題として、とらえなければならない。審議委員会として受け、問題解決に向け審議委員同士の意見の交換を活発にする必要があると思う。

白井 靖夫

公民館の社会的役割から現在までの状況までよくわかりました。

ただ、現在の公民館が社会的な期待が変わっている野を感じています。

当初の目的を見直してあたらしい公民館の像へリセットすることは必要な時期だと思います。学校教育と社会教育のコラボレーションなどの積極的推進などを具体的に伺いたく思いました。

羽根田 厚子

初めてのリモートでの講演会への参加でしたが、事前のリハーサルもして頂きスムーズに参加できました。この形式上やむを得ないことではありましたが、参加者の皆さまの顔とお名前が分からないことは残念でした。事前に参加者名簿などをいただくと、最後の質疑の際などに、どのようなお立場の方の質問なのかが分かってよかったかと思えます。

講演をお聞きして、**with** コロナの成果である、対面でなくても可能なコミュニケーションを **after** コロナにおいても活かしていくことを考えていくことはとても重要であると思えました。それによって、公民館が抱える課題の一つである、高齢者以外の方の利用率の低下の問題を解決する一つの方法となるのではないかと思います。4月以降小中学生に1人1台のタブレット端末が支給されることになっています。これを利用してのジュニア講座の開催なども可能になるのではないかと思います。また公民館に直接足を運ぶことが難しい障がい者の方や介護等で家を離れる事が難しい方なども講座に参加できるようになると思われるので、そのような方を対象とした内容の講座等も検討いただければよいと思えました。

一方、コロナによって公民館をはじめとした様々な場所に足を運ぶことができなくなってしまった高齢者が多く、引きこもりとなってしまっている方が多いということも耳にしておりますので、ハード面も含めての **after** コロナへの取り組みを充実させていかなければいけないということも感じました。

コロナによってこれまでの日常が日常ではなくなってしまったことは大変なことですが、これを良い機会ととらえ時代に即した公民館活動を考えていきたいと思えます。

新型コロナウイルスによる緊急事態宣言の中、感染防止対策を徹底した上で開催できたことがとてもうれしかったです。初めてのリモート併用開催となりましたが、中央公民館の皆様におかれましては、システムの準備、当日の機器の調整等、多くのご苦勞があったと思います。ありがとうございました。

また、勝谷会長をはじめ役員の皆様には、自主研修会のテーマや講師について話し合いを中心となって進めていただき、ありがとうございました。当日を迎えるまでは様々な意見が交わされましたが、それぞれの立場で大切にしていること、感じていることを出し合えるのが審議会でも大切なことだと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

日本女子大学、田中 雅文 教授の公演は、具体的でとても分かりやすかったです。生涯にわたって地域で支え合うことの大切さを改めて考えることができました。各機関の連携も大切です。学校としてできることを考えていきます。地域全体で地域の子どもを育てる、という小平市の理念を市全体で共有したいです。

また、今回の自主研修会でたくさんの質問が出て、それに田中 雅文 教授が丁寧に答えてくださりました。とても有意義な時間で、それを聞くことも学びになりました。参加者が増えると、質問や要望も増えてくるので、時間の配分は、次年度の検討事項だと思いました。

新型コロナウイルス感染防止対策は、今後もしばらく続きそうです。リモートも併用した開催方法は、来年度以降も活用できると思います。リモートですと、他地区や他県の公民館との連携開催、新しい取組をしている自治体の方々の参加も期待できます。今回のチャレンジで、様々な可能性が広がったと思いました。

以上を報告させていただきます。今年度の公民館運営審議会も残り1回となりましたが、どうぞよろしくお願いいたします。



小平市の公民館運営審議会委員としては初めて自主研修会に参加させていただきました。まさに緊急事態宣言下で、0歳児の育児中のため対面参加が難しかったところ、Zoomによるオンライン参加をお認めいただき、参加の機会をいただけましたことに大変感謝いたしますとともに、学習への多様なアクセスの仕方について、事務局・参加者共に経験しながら考える契機となる自主研修会になったのではないかと思います。

田中先生のご講義では、公民館の法的根拠をはじめ、公民館の機能や制度的位置づけなどの概説にはじまり、新型コロナウイルスの before, with, after に分けて事例も交えながら公民館が創り出すつながりをベースにお話しいただき有益な視座をいただきました。

最も印象に残った点としては、昨今盛んに用いられる「ハイブリット」について、オンラインと対面の「併用」ではなく、両者が混じり合うことによって新しい学びが生まれる、とするくだりです。

コロナ禍において、これまで実施できていた学びへのアクセスの担保、参加形態の代替という必要性からオンラインが多用されはじめたことは多くの方が共通認識しているところだと思いますが、そこから生まれた、あるいは生まれる得る新たなつながり（講義では障害者施設の例があげられていました）が、これまでの学びを変容させていくことへの期待を多くの方が感じ始めているのが現在の状況ではないでしょうか。また、一方で、オンラインではやはり実現できない、代替できない学び（学びの特性や対象者、云々・・・）があることも人々の実感の中にあると思います。

「コロナ禍の副産物」と田中先生が表現されたものの真髄は、このように必要性に迫られて多くの方がこれまでにない参加形態を経験したことで、これまで学習やコミュニティ参画に関心が寄せられなかった人たちも含め多くの人々の中で、「新しいつながり」に可能性を見出したり、逆にこれまでのつながりや学習の課題や豊かさを再認識したりすることが日常化したことではないでしょうか。

その意味で、新しい学びは人々の内に既に広がっているのであり、公民館がどうそれと向き合い、その学びや気づきを促進していけるハブになれるのかということではないかと思います。例えば、限りある施設をリアルを必要とする人々や場面にどう使っていくのか、その学びを閉じたものとするのではなく、オンラインとハイブリットで展開することで何が生まれるのか、オンラインのコミュニティに適した学びや段階は何か等々、市民一人一人が、仕事や家庭生活も含めた日常の再構築の中、あるいは延長線上で考えていくことが可能となっているのであり、その声を如何に拾いながら学びの工夫・転換を図っていくことが必要ではないかと思います。

こうした点を小平市さんの特色である事業企画委員会の皆様方や学びの実践者の方々などと協議していくことを通して、コロナ禍を「契機して」変わりゆく公民館の在り方が模索されるのではないかと、そのきっかけをいただいた講義であったのではないかと思います。